貧乏令嬢と銀の精霊

櫻塚森

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
貧乏令嬢と銀の精霊

【Ｎコード】
Ｎ４９９３Ｔ

【作者名】
櫻塚森

【あらすじ】
貧乏貴族のお嬢様は、とっても綺麗なのに苦労人で、人見知り。社交界は自分とは正反対の世界だけども…家族と尽くしてくれる使用人のため玉の輿を目指します…。時代考証無視の架空イギリスの昔話＊第２弾＊もう１つの物語のスピンオフ的お話。

ある令嬢の事情（前書き）

時代考証無視の架空イギリスの昔話。大目に見てください。

ある令嬢の事情

アシュットバル男爵家は、古くからある由緒ある家柄だ。

しかし、まれに見る貧乏貴族と言っていい。

困っている人がいれば、私財を投げ出し、家財道具を売り飛ばしてしまうからだ。

騙されたと気付くのも遅く、気が付けばその日の食べ物も粗末なことがあり、損ばかりしているが、とても人がいい貴族。

彼の領民達はそう思い、男爵家が食べ物に困っていれば、野菜などの差し入れをしてくれるのだった。

しかし、領地も気が付けばドンドン減り、いつのまにかタウンハウスと郊外の屋敷だけが自分達の財産となった。

人の良さは彼らを貧乏貴族にしてしまった。

しかも、そのことに暢気で、毎年のように使用人が減っている現状を仕方のないことだとあきらめているところがあった。

そのためか、彼らの一人娘は実にしっかりしていた。

幼い頃から、苦しい家計を支えるために家政婦長にあらゆる家事を教わり、その技術でもって内職をしたり、家計における経費削減を行った。

自分の身なりなど二の次で、使用人たちの給料と、食べていけるだけのお金を彼女が管理しだしてから、

男爵も奥方も簡単には騙されなくなった。

「何事もまず、お嬢様に相談する事。」

それがアシュットバル家の家訓となった。

彼女の趣味はレース編みであった。

細々ではあるが彼女の作ったレースは、とても美しく人の心を虜に

するものだと口コミで貴族の間で評判になり、知り合いの貴族達からの注文を受けるようになっていた。
しかし、ショールなど大口の注文が来ても、仕上がるまでは時間がかかり、それだけでは、男爵家が抱えた借金を返す事はできなかった。
そこで、男爵家に仕える者たちが最後の手段として、常々考えたこと。
それは、令嬢がお金持ちの相手を探し結婚するという事だった。
もちろん、持参金など持てるわけがないので、どれだけ相手に気に入られるかということが焦点となるわけだ。
この社会においてそれが一番であることは理解している男爵令嬢・ブランカであったが、その手段だけは使いたくないと常日頃から思っていた。
彼女はとても美しい女性だったが、真面目すぎるところがあり、家計に対することで頭が一杯だった。
また、現実主義でありながら、愛し合う両親の姿をみて過ごしてきた彼女にとって、打算で結婚するということに今ひとつの抵抗があったのも確かである。
使用人たちは口々に言う。
「お嬢様はとても美しく聡明だが、漂う色気がない。誘われていることに本当に気付かない。真に残念だ。」
ドレスにも化粧にも興味がなく、しばしば交際を申し込んできた殿方にあきれ返られることがあった。
レースのことになると夢中でどうにも周囲の事が入らなくなるらしい。
どんなに大切にしますと言ってくれてもお金が絡むと人を見下すモノもいた。
すべては、つれて歩くためだけのお人形が欲しいだけなのだ。
外見だけにつられてやってくる相手などお断りだった。
「けれども、お嬢様。当家の財政を立て直すには、よい殿方を見つ

ける事が手っ取り早いかと思われますよ。」
メイド頭のミセス・ボイトが言った。
メイド頭といっても、アシュットバル家には彼女ともう2人しかメイドはいない。
それは彼女の2人の娘だ。
「そりゃあ、我がアシュットバル男爵家の御令嬢であるブランカ様には、愛する方と結ばれていただきたいですが。」
執事はボイトの夫である。
メイド頭も口々に言うが、兎に角、家が貧乏である事にため息を吐いていた。

つづく

節約・倹約・大歓迎！（前書き）

貧乏貴族ブランカちゃんの質素な生活を覗いてみましょう。

節約・倹約・大歓迎！

アシュットバル家には、暖かい暖炉がなかった。
いや、暖炉はあるが、火が入っていない。
朝起きて、霜がはる早朝と就寝前にしか暖炉に火は入れない。
それが家訓である。
『寒ければ、厨房へ。』
後は、執事の編み出した、暖炉の熱を利用して沸かした湯に浸かり、厚着をして寝る。
お嬢様であるブランカが一番に入って、次々に使用人たちが温まる。
最後に執事が入って厚着をしてから暖炉の火を消しに来るのだ。
湯は、庭の草木に翌日撒くことに再利用される。
昼間は先に述べた合言葉で乗り切り、夜も節約のため本当に質素な生活をしている。
それが、アシュットバル家である。

今日も皆厨房にある5人掛けのテーブルで暖かいお茶をしながら内職をしていた。
「お嬢様に狙っていただきたいと言えば・・・。」
執事と家政婦長の2人からは同じ言葉が出た。
金持ち貴族、もしくは、上流社会への足がかりとして貴族娘との婚姻を必要とする成金。
その二つの内、どちらかを相手に選ばなければ、その内アシュットバル家はおしまいである。
「分かっている。」
淡々と返事をするブランカ。
こうなったら、相手が父以上に年上でも仕方ないかもしれないと最近は思うようになっていた。
「できれば、お嬢様に愛する方と結婚をしていただきたいですね。」

家政婦長はブランカを娘のように思ってくれているのだ。
しかし、その言葉を有難いと思いながらばっさりと切り捨てる。
「この貴族社会に愛だの恋だのは無用だ。」
気苦労のせいか、もう1つ男っぽい口調のお嬢様にも皆がため息をつく。
「しかし、お嬢様・・・旦那様は、奥様を愛しておられますわ。」
うっとりと話すのは、メイドのジェシカ。
「うむ。それは分かるが・・・それだけでは、生きてはいけないのだ。」
屋敷の一室しかも厨房で、その家の令嬢と使用人が集まってレースの生地を繋ぎ合わせる作業をしている光景など、他の貴族の者に見られたら笑いものにされるだろう。

お金のない男爵家の当主は、学者肌で趣味がこうじて大学で教鞭をとっている。
その研究にはお金がかかり、母は、その仕事にお金を注ぐ事に躊躇をしていない。
以前は騙されて、他人にお金を渡していたため、研究費にはお金を廻せなかったが、ブランカが管理するようになってから、奥方は惜しみなく夫の研究にお金をつぎ込むようになった。
「考古学というものも金がかかる。方々に出かける費用こそ、国が負担してくれているが、父上は、ご自身のことは何も出来ない人だからな。一回の発掘旅行に幾らの金がいるのか。考えただけで頭が痛い。」
もう少し小遣いを増やして欲しいと頼む親に、欲しければ金を掘り当てろと言い捨てた娘である。
「そうですねぇ、けれど、お嬢様。旦那様も反省なさって、発掘には行かれても期間を短くされておりますわ。」
「あれだけの明細書を見せれば帰ってこざるおえんだろう。私の作戦だ。」

ふと内職の手が止まる。
「母上と父上は、互いに傍に居られれば幸せと仰っているが、食べるものにも困るほどでは、駄目だと思うのだ。」
皆の頭に浮かぶのは先日の事件である。
「作用にございます。先日はとうとう最後の宝石を売ることになってしまい・・・。」
「さすがに母上も落ち込んでいたな・・・。田舎に引きこもってしまわれた。」
母親にはメイドのマリーが付いて行った。
「それはそうでしょうとも、あの宝石は男爵が奥様に、送られた婚約指輪についていたものですもの。それを忘れておしまいになるなんて。」
ため息が漏れる。
母親に出て行かれた父は研究そっちのけで彼女を追いかけていった。取り戻す手段などないくせに。
けれど、やらなければ、家庭崩壊の危機である。
「とりあえず、あの紫水晶を取り戻す。そのために・・・よい相手を見つけねばならないのだ。かと言って、貴族のパーティなど・・・着ていくものもないし、招待状もない。ははっ、八方塞りだな。」
美しい紫の瞳を持つ彼女はもう1つため息を吐いた。
そう、着ていくものがないのだ。
この玉の輿作戦が話題に出てすぐレースの上客である伯爵夫人からパーティに招待状が来た。
ブランカは屋敷にある母親のお古のドレスを少しでも見栄えよく見えるようにリメイクをしてみたが、パーティでは笑いものにされただけだった。
仕方ないとは思ったが、少しだけ貧乏であることを恨んだ。
「さて、どうしたもんかな…。」
皆が一様に同じようなため息を漏らした。

つづく

節約・倹約・大歓迎！（後書き）

次回は、５／２７です。

銀の精霊騎士現る！（前書き）

精霊ってのは大袈裟です。人間、人間。
時代考証無視の架空イギリスの昔話です。

銀の精霊騎士現る！

「本当によろしんですか、お嬢様。」
大きな荷物を抱えているブランカをミセス・ボイトは心配そうに見ていた。
「よい。皆にはそれぞれに仕事があろう。たまには街に出て、これの納品のついでに流行のドレスなどを見てこようと思うから。ドレスを買う金はなくても、流行が分かればドレスのリメイクもしやすかろう。」
レースのベッドカバーを注文したのは、知り合いの伯爵夫人だ。
それを昨日やっとの思いで仕上げ、委託販売をしてくれる店に収めに行くことが今日の仕事だった。
できれば、その伯爵夫人のツテでどこかのパーティにでも出かければと言うのは、ミセス・ボイトの案である。
執事は、昨夜仕事の終わった後、老朽化した階段の踏み板が抜けそうになったことに驚き転落、腰を痛めたため動けなくなった。
変わりに行くと言ってもミセス・ボイトと娘のジェシカも、家のことで精一杯なのだ。
少しでも綺麗にしておかねば、いざ家を売る段で値引きされても困るからだが、階段の修理にまたお金がいるとなると一同はまたため息を吐くしかなかった。

家の馬車ではいかない、これもまた、理由がある。
自持ちの馬車はあるが、馬が年を取りすぎて無理をさせられないのだ。
かといって、長年アシュットバル家に仕えてくれた馬である。
人情の厚いブランカはどうしても最期まで面倒を見たかった。
「ジェリー無理はしないくていい。お前はここで大人しくしているのだぞ。」

町外れで敷地だけは何かあるアシュットバル家の厩舎で彼に声をかけるのもブランカの日課だった。
できるだけ歩いて辻馬車を拾い市街地へと向かった。
ブランカは街を歩く若い娘の姿などを観察した。
暫くして、馬車を降りたブランカは、ショーウィンドウを覗きながら歩いた。
みな上品そうで華やかなドレスばかり。
ふと窓に映る自分の姿を見てため息を吐いた。
そこらへんの街娘と変わらないのだ。
「ホント仕方ないな・・・。」
一息吐いて店の扉を開けた。
重いレースの束を持っていた彼女を気遣ってか、扉を開けてくれた人物がいた。
「すまない。」
「いいえ、どういたしまして。レディ・・・。」
すっと彼女の持つ荷物を受け取ってくれた人物をブランカは店の者だと思ったが、その人物に駆け寄る見知った店の従業員がいた。
「マ、マーティン卿！」
貴族か。
ブランカは、その男の背中を見た。
どうやら客としてきたらしい。
「申し訳ありません、マーティン卿。」
「いいえ、美しいレディの・・・。」
振り向きざまに店内の奥を目指していたブランカと彼の目が合った。
碧い瞳がじっとブランカを見て離さない。
あまりにぶしつけな視線にブランカは眉を顰めた。
「・・・美しいお嬢さん、あなたの名前は？」
ブランカは、名乗りもしない相手に名乗るつもりなどなかった。
今度は、ブランカがじーっと彼を見た。
彼はにっこりと人懐っこい笑顔を見せて彼女が望む事を悟った。

「これは、名乗るのが遅くなりました。ジオン・G・クラインハイブと申します、皆はマーティン卿と呼びますが、レディ、あなたにはジオンと呼んでほしいものです。」
世間に疎いブランカもさすがにクラインハイブの名は知っていた。
相手が自分よりも随分位の高い貴族だと分かったブランカは1歩下がって礼儀にのった挨拶をした。
「ブランカ・アシュットバルです。・・・マーティン卿。荷物を持っていただきありがとうございました。・・・では。」
ブランカはさっさと店の主人の方へと向かっていった。
（噂にたがわぬ男だな。）
噂好きの貴婦人がたまにレースを頼みに来る時がある。
自分の年頃の娘の婿として、必ず上がる名前の主でもある。
背も高く、背筋がよいのは乗馬をしているからだろうか、フェンシングのせいだろうか。
そんなことをふと思ったブランカは、未だに彼の視線が自分に注がれているのを感じた。
社交界で彼を知らないものはいない。
シルヴァリー公爵家と並び称されるクラインハイブ公爵家。
女王陛下の末の弟君の家族である。
シルヴァリー家とクラインハイブ家の嫡男は、それぞれが銀髪に緑瞳、青瞳を持ち、1人は、銀の貴公子、もう1人は佇まいがとても美しいこと、フェンシングの腕が一流で反対を押し切って近衛隊に所属していた経緯もあり、銀の精霊騎士と呼ばれている。
シルヴァリー公爵家の嫡男であるライモンとは、何でも話し合える親友関係で、彼とは、貴族社会の銀の双璧と呼ばれている。
（将来の大英帝国には欠かせない人物の1人か。）
ライモンの方は貴公子とよばれるだけあって、気品があり、女性に持てながら硬派であるが、ジオンは、近衛隊に所属するだけあって硬派な人物だと思われがちだが、自分が美しいことを十分知っていて、一夜のお遊びにも付き合う悪戯っ子なところがあるとのこと。

本人曰く近衛隊隊長という夢が絶たれてヤケになっただけなのだそうだ。
精霊のように気まぐれで、騎士のように女性を守る、フェンシングでは負けなしと聞く。
そんな人物と自分との接点といえば、天と地ほどもあるが“貴族である”ということだけだろう。
ブランカはそう考えていた。

つづく

銀の精霊騎士現る！（後書き）

優男登場！！

次回は、６／１です。

精霊騎士は腹黒です（前書き）

時代考証無視の架空イギリスの昔話です。マーティン卿、口説きに入ります。

ジオンは、自分を前にして挨拶以外何も言ってこない娘がいることに驚いた。
思わず、店の扉に背中をつけて笑う。
ブランカは何やらマーティン卿が笑っているようだが、気にせず商品を主人に見せようとしていた。
しかし、女店主は、ブランカを前にしながら、後のマーティン卿に意識を取られているようだった。
「・・・すまないが、仕事の話をさせてもらってもいいだろうか。」
声をかけることで、やっと女店主はブランカに向き直った。
「ま、まぁ、申し訳ありません、お嬢様。今日は、執事の方ではいらっしゃらないのですか。」
「えぇ、ちょっと、用事がありまして。私が参りました。伯爵夫人に頼まれていたものです。」
ふと甘い果実のような香りが隣でした。
「！」
「マ、マーティン卿っ！」
何事もなかったように彼女の連れのように隣のソファに腰をかけて微笑む彼の姿があった。
「マーティン卿？クラインハイブ侯爵夫人のハンカチーフは、受け取られたのでは？」
「どうぞ、気になさらずお話を続けてください。」
ブランカに向けられた彼の視線がとても熱っぽいものだったため、店の主人も、たまたま店を訪れた女性客も彼が何を考えているのかを見届けるまで動けずにいた。
動かない空気にブランカは大きくため息を吐いた。
「・・・マーティン卿・・・。」
「なんだい？レディ・ブランカ。」

隣を見ると目が合ってしまう。
そう思ったブランカはあえて彼の方は見ずに尋ねた。
「まだ、私に何か・・・？」
「今度、弟の誕生日パーティがあるんだけど、君にも来て欲しいと思ってね。」
ブランカはハッとなり彼を見た。
そして、その眼が自分を見ていることに恥ずかしさを覚えて再び目を逸らした。
「な、何故・・・行く理由がありません。」
言った後で、せっかくのチャンスをと嘆いている家政達の顔が浮かぶ。
スッと目の前に出される招待状らしき封筒。
「知り逢った記念。」
マーティン卿は立ち上がった。
「待って・・・。」
ブランカは立ち上がった。
「こ、困ります・・・。」
そう招待されても着ていく服がないのだ。
「どうして・・・。」
ブランカの家の事情を知っている客がクスクスと笑った。
皆の視線がその主へ向く。
そこには、ブランカと同じ年頃の貴族の娘がいた。
「マーティン卿？無理ですわ。レディ・ブランカには、着ていくドレスがありませんもの。」
明らかに侮辱を含む言葉。
その言葉を発したのは、レディ・ミランダ。
コンスタンチン子爵の娘だ。
「弟君の誕生会・・・是非わたくしに、招待状を戴きたいものですわ。」
自分の方が相応しいと言わんばかりにミランダはジオンに寄り添っ

た。
流行のフリルのついた萌黄色の服に、美しく結い上げられた髪。
何処から見ても貴族の娘だった。
「レディ・・・えーと、」
「ミランダですわ。」
「ああ、そうそう、レディ・ミランダ。では、どうぞ、この招待状を。」
差し出された招待状を受け取ったミランダは、頬を染めて喜び、ブランカを見た。
「ごめんあそばせ、レディ・ブランカ。あなたは、庶民のように地道にレースでも編んでいらっしゃる方がお似合いよ。」
高笑いをするミランダ。
ブランカは、大きなため息を吐き、主人と商談に入る。
今更、パーティに行ったところで、誰も見向きもしてくれないだろうとブランカは今できることに集中しようと思った。
「マーティン卿。送っていただけませんの？」
「ん～レディ・・・えーと。」
「ミランダですわっ！」
「申し訳ないですが、母のお使いがまだなんです。どうぞ、お先に。」
「さっき、公爵夫人のお使いは終わったと仰ってたじゃありませんか、店の者が。」
ジオンは心の中で舌打ちをする。
しかし、娘に向けた笑顔は精霊そのものだった。
「聞き違いでは？」
ジオンは扉を開けてミランダに出るように促した。
「では、また、パーティで・・・きっと、ダンスを踊ってくださいますわね？」
食い下がるミランダ。
ジオンはニッコリと笑った。

「さぁ、どうでしょう。貴方の事がこの瞳に映ったならば・・・。」
やんわりと、アナタとは踊るつもりなどないと言ったジオンだったが、ミランダは彼の瞳に自分が映るのは間違いないと自信があった。
ミランダは店の中、女店主と話をしているブランカに嘲笑の顔を向けてスッとジオンに手を差し出す。
「では、御機嫌よう、ジオンさま。」
「・・・御機嫌よう、レディ・・・。」
名前を言う前にジオンは手を離した。
「えっ、あの。」
促されては出るしかないミランダは渋々店を後にした。
ソレとほぼ同時にブランカは商談を済ませ、席を立った。
「ありがとう、また頼みます。」
「そ、そんなお嬢様。」
たとえ貧乏でも貴族然とした振る舞い。
身なりは、街娘と変わらないがブランカは美しかった。
「レディ・ブランカ。お送りします。」
目の前に立つジオン。
ブランカは先ほどマーティン卿が言っていた言葉を思い出した。
「ま、まだ用事があるのでは？」
言った後で、自分が聞き耳を立てていたように思われるのではと内心焦っていた。
しかし、マーティン卿はにっこりとした笑顔で彼女に言った。
「とんでもない。あなたを送るという用事はありますけどね。」
手を取られ、馬車へと促される。
ブランカは辻馬車代金が浮くと簡単に考えてその手を取る事にした。

「一目惚れというものを信じますか？」
馬車に乗るなり彼にそう言われた。
「は？」
どう言う状況か分からず、頭の中を整頓していたブランカは彼の言

葉を聞いていなかった。
「アシュットバル家の事情は存じてますよ、」
その言葉は、今までもイヤってほど耳に入ってきた。
「・・・は、恥ずかしい限りだが。真実だ。」
隣で自分に接近するほど近くに座っている彼は満足そうな顔をしている。
「しかし、あなたという存在が男爵家をギリギリのところで支えているのでは？」
「・・・そうだろうか・・・。」
自分の身の上など聞いてくれる人物などいなかった。
そのせいだろうか、ブランカは家のこと、父母の事を初めて会ったこの貴族の男に話をした。
「父上の頭の中は、大学と研究に傾倒しがちで、母上は世間知らずだ。歴史ある男爵家をつぶすわけにはいかないから。皆から、良い結婚相手を見つけるべきと言われたが、私は社交が苦手で・・・」
馬鹿にしているだろうとブランカは思った。
年頃の貴族の娘が社交界を苦手にしているなどと、人生を捨てているようなものだった。

つづく

伯爵家の人々

「デビュタントは、父上が？」
馬車の中でブランカは自然と彼の質問に答えてしまっていることに少し戸惑っていた。
「・・・一応、貴族の娘ということもあって、知り合いの伯爵夫人のパーティで・・・。」
思い出す苦い記憶。
「あの頃は、今よりも貧乏だったから、伯爵夫人の令嬢のドレスを借りて・・・。私も父もああ言う場は苦手で・・・とりあえず早く終わらせたくて、数時間で帰ったが・・・、私たちは、笑いの話題だけを振りまいて帰ったらしい。」
「笑い？」
ブランカはあの日を思い出して苦笑した。
「伯爵夫人の令嬢は、貧乏貴族の私になどドレスを貸したくなかったのだ。だから、とても古い・・・それこそ、裾のすれたようなドレスを貸してくださった。父は学者としては一流だがその辺りは気にもしないので、いいのだが、私には・・・。」
あの時感じたのは、伯爵令嬢の自分や父に対する気持ち。
「父上が馬鹿にされているように感じたんだね？」
ブランカは頷いた。
「しかし、そんな古いドレスを君に貸したと伯爵夫人が知ったら、令嬢は叱られたんじゃないのかな。」
ブランカはまた苦笑した。
「その辺は少し事情があって、複雑なのだ。伯爵夫人は、若い頃、父に憧れていたらしくて。けれど、父にはそういう感情がなく、また、気付かぬうちに、母という存在を見つけられ、伯爵夫人の気持ちなど気付くことなく結婚した。伯爵家としては、身分の低い夫を持たなくて済んだと言うことで、父には感謝しているようだ。だか

ら、伯爵家は今でも私の家を時々は助けてくれている・・・。」
ブランカはため息を吐いた。
「しかし・・・。」
ジオンは、彼女が全てを語らなくても、悟っていた。
伯爵家としては、王家の誉れも高い、学者であるブランカの父親を援助していることで面目は保てるが、伯爵夫人としては、自分の気持ちになど全く気付くことなくブランカの母を選んだ父に対するわだかまりがあるのだろう。
きっと、その娘は、その話を母からイヤというほど聞かされて、パーティに招待する彼女に恥をかかせることで鬱憤を晴らしているのだと考えた。
「伯爵家には、跡取り息子がいましたね。」
ブランカがギクリとした。
表情は変わらないが彼女の硬直具合で、息子が彼女にチョッカイを出しているのだろうと確信した。
「彼は、親切にしてくれるが、母親や令嬢には逆らわない。」
「彼がいるから、あまり、伯爵家とは親しくしたくないのだね。」
かすかに頷くブランカ。
彼は親切だが、事あるごとにブランカを貧乏だとけなし、父を侮辱する発言をする。
「学者としては、お父上はとても誇り高い方だが、貴族としての誇りはどうでしょう。財務に関して無関心な領主など、民を苦しめるだけではないですか。貴方には持参金がない。ですから、私としては貴方を妻に迎えることは家のことを思うと許されないでしょう。でも、安心を。私は貴方を愛人にしてあげられます。お金に苦労することなく、暮していけるほどに・・・。どうです、ブランカ。私の手をとりませんか？」
お金のために自分の愛人にならないかと言われたこともあった。
黙っていて、綺麗なドレスなど身なりを整えていれば、ブランカが誰にも引けを取らない美しい姫に変身することを彼は知っているの

だ。
美しい愛人を囲うことも貴族としての矜持だと思っていることも彼は堂々と告げた。
つまり、彼の父親はそう言う人で、彼を見て育ってきた息子も基本、美しい女を囲うことはステイタスに繋がるという考えの持ち主なのだ。
2度ほど、どうしてもと誘われたパーティでは、その父親にまで愛人になれと言われ、ブランカは二度と伯爵家に足を踏み入れなくなった。
それでも、伯爵夫人は上顧客だ。
その縁を切るわけにはいかない。
「とりあえず、彼らからの招待状は無視しているが、こちらの足元を見られているので、そろそろ、応じるだろうとは思われてるだろうな。」
大きなため息。
彼らどちらかの要望に答えて、その屋敷を訪れる。
その条件を飲まないことには、いずれ妻である伯爵夫人には、一言口添えをするぞと言われた。
「アシュットバル家にかかわるレースなど、手に取るな。」
上顧客を失っても、伯爵親子には屈したくないブランカだが、伯爵が言えば、他の客も遠ざかっていくことだろう。
ソレを思うと、ブランカには自然とため息が。
「では、ブランカ。あなたが、伯爵家に妙な義理を感じなくてもいいように、これからは、私に関係するパーティに参加してはどうですか？」
ジオンがブランカに笑顔を向けた。
暢気にも、やはり、この人はいい香りがすると彼女は思った。
「そして、彼らの招待するパーティには私とともに参加する。」
ブランカは意味が分からないと首をかしげた。
「とりあえず、私のパートナーとなれば、伯爵家は手出しできない。

それに・・・漏れなく、我が母という、伯爵夫人よりももっといい商売相手が見つかるし。」
クラインハイブ公爵夫人がレースを気に入ってくれたとしたら、もっと、もっと心を込めて作ることができる。
「貴方の家のことを思って、貴方のレースを使って差し上げてるの。分かってらっしゃるかしら？私への恩義を感じているのなら、主人や息子に手を出さないで頂戴。」
亭主と息子に口説かれて困っているところを夫人に見られたことがあった。
それ以来、彼女は何かにつけブランカを淫乱女だと罵るようになった。
上客だったが、もう無理かもしれない。
そんな思いで今日は最後の作品の納入に来ていたのだった。

つづく

先手必勝のかまえ（前書き）

サブタイトルを数字にすべきだったと反省中。

先手必勝のかまえ

マーティン卿の提案にブランカは少しばかりの躊躇を見せていた。
彼の実家と比べれば、貴族とは言え身分も低く、自分を連れて行くことで彼に恥をかかせるのではないかと。
「では、良縁を求めて、また1人で、伯爵夫人のパーティにまた出るのかい？父上は一緒に行ってくださらないのだろう？」
黙っているブランカにマーティン卿が尋ねた。
「とりあえずは、そろそろ招待に答えなくてはならないし、私の家の事情もあるから・・・よい場に招待してくだされば、一応、今まで断ってきたお詫びをかねて、今日納めたレースに手紙を添えてみた。」
マーティン卿は視線を外すブランカを見つめながら言った。
「でも、本音を言えば、伯爵家の主催するパーティには出たくないんだね？」
ブランカはそっと視線をジオンに向けた。
綺麗な紫の瞳が彼を見つめていた。
「では、私からのお願いだ、それらのパーティの時に、私をパートナーとして連れて行っていただけないだろうか。」
「えっ？」
「さっきも言ったけど、伯爵家に従うより、私の提案に乗る方が賢いと思うよ。」
彼がパートナーとなってくれるのであれば、伯爵もその子息も怖くないし、色々な門戸が広がる、願っても無いことだが、ブランカは恐れ多いと断りの言葉を述べた。
「私などのパートナーになっては、クラインハイブ家の名に泥を・・・。」
彼はそっと彼女の手をとった。
「君が多くのパーティに出ることには、男爵家にとっては必要なこ

とだ。しかし、無理に結婚相手を見つける必要はないと言っているんだよ。」
良い結婚相手を見つけるためにパーティに出なければならないのに？
ブランカはジオン・クラインハイブ・マーティン卿をじっと見つめた。
「つまり、結婚相手は別として、男爵家の資金援助を求めるためにパーティには出る必要があると言ったんだ。そのためには、君という人物がいかに素敵な女性かという事を世間に知らしめなくてはならない。ならば、私をパートナーとして連れて歩けばいいんだよ。そうすれば、クラインハイブ家がアシュットバル家に資金援助をしているという宣伝になるだろ？クラインハイブ家に従う家は多い。きっと、無理矢理相手を見つけなくても、男爵家の財政は救われることになるだろうね。」
ブランカはジオンを尊敬のまなざしで見た。
「そ、そのために私のパートナーとなってくださるのか？」
ジオンは苦笑した。
「分かってるのかな？」
「えっ？」
ジオンはブランカの手をとり、その手に口付けをした。
「！！」
「私はね、ブランカ。君を一目見て、妻にしたいと思ったんだよ。」
ブランカは絶句した後、呆然とした。
「は？」
「君にふさわしい相手は私しかいないと言いたいんだ。だから、男爵家のために一肌脱ぐことにした。
そして、君という存在を私のパートナーとして世間に披露したい。」
ブランカは慣れていないので、ジオンの行為に頬を染めながらも戸惑った。
「き、気まぐれでそ、そのような。」
「気まぐれ？大いに真面目だよ。ブランカ。生涯私だけの者になっ

てくれ。」
唐突なプロポーズ。
ブランカは固まってしまった。
今まで付き合った女性とは違う反応にジオンは苦笑してしまった。
「・・・手始めに、弟のパーティでそれを世間の皆に知らしめてあげるよ。」
軽く引き寄せられ、ブランカは頬にキスを受けた。
「はぁ？何を言って・・・は？」
気が付くと馬車はアシュットバル家の前だった。
出迎えたミセス・ボイトをはじめとした使用人は、自分の大切なお嬢様が社交界で知らぬ人はいないとまで言われるマーティン卿にエスコートされて馬車を降りてきて一様に驚いていた。
「やあ、こんにちは、」
「は、はい。」
緊張が隠せないボイド夫妻。
「唐突で悪いんだが、私は、今日彼女にプロポーズをしたんだ。」
笑顔と共に発せられた言葉にぽかんとしている使用人達。
馬車から降ろされたブランカ自身もぽかんとしている。
「もう一度、言おうか？私は、このブランカ嬢に恋をして、求婚をしたんだよ。」
マーティン卿からブランカに求婚したことを再び耳にし、今度は、声をそろえて驚いた。
「正式なプロポーズは、近いうちにするから、それまで色々なところに一緒に行こう。いいね、ブランカ。」
帰り際に受けた唇へのキスにブランカは、何が起こっているのかわからないままだった。

つづく

思わぬ行動

「そうだ、バトラー。」
執事のボイトをジオンは呼びつけた。
「この後、我が家のパーティに彼女を招く招待状を送る。もちろん正式なものだ。で、それと一緒に仕立て屋も手配するから、彼女に最高のドレスを用意してくれ。何着でもかまわない。すべて私が払う。」
優雅で、颯爽としたジオンの身のこなしに男爵家の者はみな呆然としていた。
「聞いているのか？返事をしたまえ。」
呆然としている彼らの心情は理解できるが、しっかりしてもらわねば困るのだ。
「は、はい！も、申し訳ありません。承知いたしました。」
ボイド家の使用人は、全員集合の姿勢で彼の乗った馬車を見送った。

「お嬢様！！」
皆がブランカに駆け寄って祝福の言葉をかけた。
「ああ！なんてことでしょう！」
ジェシカが感嘆の声を上げた。
大きな声にジオンのキスで呆然と立っていたブランカは現実に戻された。
「運命の神様がいらっしゃったから、あんたは、腰を痛めたのよ！」
ミセス・ボイトが雄叫びのような歓声を上げて夫である執事に抱きついた。
「そうだ、そうに違いない！私が店に行けなかったから、お嬢様が店にいくはめになったんだ！」
「なんて、素敵な方に見初められたのか・・・。」
おおはしゃぎのボイト家をよそにブランカはまだ、現実が受け入れ

られていなかった。
（マーティン卿はお優しい方だ。我がアシュットバル家の内情を知って・・・そのようなことを・・・。私など娶ってもよいことなんかないのに。・・・私はこの恩をどうやって返せばいいんだろうか。・・・それに、このような婚約で、心を痛めるご令嬢もいるだろうに・・・。）
ブランカはこの後届いた招待状と、仕立て屋の登場に生まれて初めて貴族の娘である実感を得た。

あのレース屋から彼女を送った後、改めて正式にパーティに招待したいこと、近日中に招待状が届くことを使用人に告げ、彼女にキスをした。
マーティン卿の中で蘇るのは柔らかい唇とあの真っ直ぐな瞳。
「・・・参ったな。」
ついでのように簡単なプロポーズをしてしまったことは予想外だった。
馬車の中で行われていたことをマーティン卿がアシュットバル家に伝えた時、一番驚いていたのは、クラインハイブ家のフッドマン達かもしれない。
彼らは、主が真面目な恋や、結婚に興味があるとは露ほどにも思っていなかったからだ。
そんな従者の心など知らぬ主も今まででは考えられない行動に出た自分を振り返っていた。
「早く手に入れてしまわなければと直感が働いたんだ。」
1人呟いてみた。
そう、彼女を見た瞬間に味わった幸福感にいつまでも浸っているわけには行かなかった。
あのまま、彼女を手に入れないでおくと、彼女は意に染まぬ結婚に望まなくてはならないはめになってしまっただろう。
噂に聞く伯爵家の当主と息子。

ハッキリ言って、身分がいいからとその上に胡坐を組んでいるような男達だ。
貴族の矜持なんかこれっぽっちも感じてないくせにブランカには大層な口をきいたもんだと彼は思った。
ブランカをあんな連中に渡してはいけない。
それも直感が働いた。
彼女は、良縁をもとめて、これから苦手な社交界にでなければならないと言っていた。
ならば、その相手が自分であって悪いことはない。

彼女は美しい。
少しの飾り付けで世の男性の心を虜にしてしまうだろう。
そうなっては、遅いのだ。
（彼女の出会った最初の貴族の男が俺でよかった。）
ジオンの頭の中では伯爵家の息子のことなどチリにも等しい存在だった。
馬車の中での彼女への頬キッス、そして別れを惜しんでした唇へのキス。
ブランカにしてみれば、こんな真近に男性の顔を見る事などなかったのだろう、
完全に固まってしまった彼女を思い出すと何もかもが愛らしいと思えてしまうのだった。

つづく

マーティン卿

マーティン卿を乗せた馬車が屋敷に帰ってきたのは、正午過ぎだった。
今日は、母親のお使いの後、仕事で家には帰ってこない予定だったのではと家の者を慌てさせた。
「セバスチャン、」
「はい、なんでございましょう、若様。」
屋敷に帰ったジオンは、執事に早速とばかりにブランカの家に招待状を送る手配をさせた。
「は？」
「？・・・だから、アシュットバル家のブランカ嬢に招待状を送って欲しいと言ったんだが・・・。」
ジオンが個人的に招待状を送りたいと思う相手が出てきた。
その事実にクラインハイブ家は沸き立った。

「ホントなの！ジオン！」
広い屋敷の中だというのに、ジオンの母親が奥から出てきた。
「母さま・・・。」
抱きつき嬉しそうな声を放つ母親はジオンの今までの女性遍歴を嘆いていた。
「ただ1人の人を見つけたのね？」
母親は彼が小さい頃から何かを求めていることを分かっていた。
分かっていたからこそ、彼が自暴自棄になっているように感じて悲しかったのだ。

そんな彼も社交界で親友を得て、数年前から事業に力を入れるようになり、やんちゃぶりも落ち着いてきた。
本当に親友たるライモン達には感謝しきれない夫人である。

「えぇ、前世からのつながりがあると確信した女性をようやく見つけました。母さまにも、父さまにもご心配をおかけしましたが、もう、大丈夫です。」
前世の記憶などと言えば大袈裟だが、いつまでもフラフラしているジオンは、逃げ口上として、自分の相手は前世での恋人しかいないと言っていた。
前世の恋人などと言われても両親には分かるわけもなく、だったら、口出しは無用でと家族の口を封じたのだ。
ライモンのように女王陛下にではないが、両親に自分の相手は自分で探すと断言していた。

しかし、元より前世の記憶など彼自身持ってないし、信じても居なかった。
そして、この広いロンドンで自分が望む人など見つけるなど面倒なことだった。
面倒で遊んでいた時も“クラインハイブ家”の跡取りとして、子孫を残す必要があることは感じていた。
せっつく両親の気持ちも分かっていたし、ライモンが例の提案で陛下からの縁談を断ってしまったこともあり、もし、約束の年である、あと一年で相手が見つからなければ、英国にとって、家にとってよい相手を娶ると陛下と約束をしてしまっていた。

ジオンは相手がブランカであることを告げた。
「まぁ！イザベラのお嬢さんが！？」
「えっ？」
よくよく話を聞くと母親とアッシュトバル男爵夫人は幼馴染だということだった。
「母さま、年頃の娘さんがいると分かっているのなら、引き合わせして欲しかったですね。」
にこにこと笑う母親に息子はイラッとした。

「あなたの噂を聞くたびに、年頃の娘さんを紹介するなんてできないって思っていたのよ。だから、あなたが本当の相手を見つけたという事は嬉しいけれど、・・・本当に過去を繰り返したりしないでしょうね。」
疑いに近い目を向ける母親に苦笑するジオン。
「安心を。私にしか、彼女も彼女の家も救えないでしょうからね。」
母親は息子の将来に光が射してきたことに安堵した。

彼は親友であるシルヴァリー侯爵家のライモンのように自分の相手というものを自由に選べない。
そもそも、陛下にライモンが余計なことを言わなければ、陛下の御鉢がこっちに回っては来なかったのにと何回も愚痴ったことがあるジオンである。
「だったら、君もそう言えばよかったんだよ。」
しれっと返してくる親友に、自分は普通の子供だったんだよと愚痴ったこともあった。

「イザベラは確か男爵のお供で静養中だったはず。早速お手紙を書かなくちゃっ！」
実際は、家を飛び出した夫人に男爵が付き添っているのだが。
息子が決めた決意が揺るがないうちに周りを固めてしまおう。
夫人はそう思い、行動を起こした。
嬉しそうに自分付きのメイドの名を呼びながら自室へと戻って行く母親の背中をジオンは呆れた顔で見ていたが、
「母の行動も俺にとっては悪いことではないか。」
とほくそ笑むのであった。

つづく

親友との一時（前書き）

サブタイトルなんかつけるんじゃなかったと反省中。

親友との一時

翌日の昼、アシュットバル家に正式な招待状が届けられた時、ジオンは親友の部屋にいた。
いつも真面目で気難しい顔しかしない彼が終始ニコニコしている。
どうやら運命の半身を見つけたらしい。
社交界はその話で持ちきりだ。
自分と彼女とのことを自慢されるのかと余り訪問に乗り気ではなかったが、話の内容は、フランスにいるもう1人の親友が今年の社交界に帰ってくるという前情報を得たことに始まり、仕事の事もあった。
「この間、インドの貿易会社から言ってきたことなんだが、」
ライモンの彼女について聞きたかったが、どうやら仕事が先らしい。
何処までも真面目なヤツだと思っていたら、ライモンは突然話を振ってきた。
「男爵家の御令嬢とはね。」
まだ話しても居ないことを簡単に口にするライモンにジオンは呆れた。
「何処からその情報を？」
「レディ・ミランダ。ついさっき本家のお茶会に来てた。」
頭に浮かぶ顔。
あの店に居た女かと納得した。
「君が自分を無視してその貧乏男爵令嬢を送っていったって、かなりの噂になってる。レディ・ミランダは君に夢中みたいだね。自分の方が相応しいのにジオン、君を彼女が誘惑したとか何とか。君の母上も困っていたようだ。」
熱烈アピールは興冷めだとジオンはため息を吐く。
別にレディ・ミランダと約束などしていない。
ただ、弟の誕生日会の招待状をくれと言うからやっただけなのに。

「持参金も出せない家柄の女をジオン様が相手にするはずはありませんわって、母親の前で言い切っていたぞ。」
「それをお前は黙って聞いていたのか？」
にっこりと笑う。
「隣の部屋でな。叔母様は引きつった笑いをしていたが、アレは嫌われたな。」
「母は、身分とかに拘り蔑む人が嫌いだからな。レディ・ミランダの実家はおしまいかな。父さまは、母に甘いから。」
母は、暢気なお嬢様だが、好き嫌いがはっきりしている人だ。
幼い頃から領民と共に泥まみれになって畑仕事などをしていたこともあり、労働階級の者たちへの気遣いを忘れない。
未だに暇を見つければ実家の領地へと出かけ、農地を耕す領民が止めるのも聞かず畑仕事をしている。
父との出会いは、泥まみれの母に踏んづけられた時だというから笑える。
「で、彼女の何処に引かれた。」
「真っ白なところ、白すぎると汚したくなる。俺だけの女にしたくなる。」
フッと笑う。
おそらくライモンもディアナに対しては同じ事を思っているのだろう。
「お互い将来の伴侶を見つけたんだ。逃しはしない。」
カチンとワインの入ったグラスを合わせる。
「でも、まぁ、今頃、男爵家は大慌てだろうな。」
「ああ、彼女の顔が戸惑っているのを見るのも面白い。」
「悪趣味だと言われるぞ。」
クスリと笑う。
「悪趣味だろうが何だろうが、あの顔に表情がともる時、俺が側にいないのはイヤだな。」
再びグラスを合わせる2人。

「お互いの将来に。」
「将来が明るいことを祈って。」
2人の貴公子は、お互いの検討を称えあった。

「それにしても・・・美しいが、変わり者と有名な令嬢だろ？」
ライモンが面白そうに言う。
「社交界には、全くと言っていいほど出てこない。深窓の姫君だよ。」
彼の言葉にまたライモンは笑った。
「まぁ、男爵も奥様もあそこは少し変わっているからな。検討を祈るよ。」
友人に見送られ、屋敷を出たジオンこと、マーティン卿の足取りは軽い。
ライモンとは従兄弟同士。
何かと比較され、ライバルだ何だと言われているが自分達はいたって普通に遊び、学び、仕事をしている親友同士だ。
お互いに大きな家の跡継ぎであることは間違いなく、王家にも連なる血筋でもある。
見目麗しい姿と立ち居振る舞いで世の貴婦人方を虜にしている彼は、かなりの浮名を流していたが、ここ数ヶ月はその名も終息気味で、社交界の貴婦人方からは、淋しいとの声も聴かれていた。
「そろそろ遊ぶのを止めて、半身を見つけろよ。」
そう友人に苦言を呈されたことは何回もあった。
（早いトコ見つけないと、勝手に婚約者が登場しそうだからな。）
彼が選ぶ相手なら誰でもいいと両親からは言われている。
一方、周囲の貴族連中は、彼に、
「運命の相手など、私達が決めて差し上げます。」
と言っては自分達の娘をこれでもかと進めてくるのだ。

そんな彼が気になる相手を見つけた。
純真無垢な姫君。
少々懐の固い、しっかり者とくれば母も父も喜ぶだろう。
何しろ、自分が気に入ってる。
母の許しも貰った。
「さて、招待状を彼女が喜んでいてくれればいいんだけど。」
彼は家に向かう馬車の中でそう呟いた。

つづく

マーティン卿からの恋文

色とりどりの布が部屋一杯に広がっていた。
ブランカは呆然とそれを見下ろしていた。
先ほどからボイド夫妻を始めとするボイド家の人達は、我がお嬢様に似合う色、似合わない色などを業者と話していて、流行の型などについても話を進めている。
気が付くと布を肩に当てられて、あーでもない、こーでもないと言われている。
「お嬢様は肌理の細かい美しい肌と美しい黒髪をしておいでです。どのような色合いでもこなしてしまわれますわ。」
悦に入った表情でいうのはクレインハイブ家御用達の洋裁店店主マリアンヌである。
公爵夫人の洋服のデザインも彼女が一手に引き受けているそうで、彼女は常々夫人から息子であるジオンの素行についての悩みを聞かされていたため、やっと本気の相手が見つかったのだと嬉しかった。しかも、着飾ることに慣れていない令嬢を自分の手で美しく変身できるのだ、マリアンヌは嬉しくてたまらなかった。
「で、できればもう少し薄めの色を。派手なのは好きでは・・・。」
「よろしゅうございます。そう言う控えめなところがジオンさまのお心を捕えたのですね。」
ギョッとする。
「そ、それは違う。」
正式なプロポーズは今度とか言われたが、俄かに信じられないことだ。
社交界に疎いブランカにすら、彼の噂は耳に入ってきていた。
噂に違わぬ麗しい顔と姿をしていたのには、驚いたが、表情が上手くでない性質なので、余計に彼の興味を惹いてしまったのだろうと思っていた。

笑うのも、お世辞を言うのも、ダンスも苦手であることをパーティに出るたびに伯爵令嬢に暴露され、裏で笑われた。
そんな自分が家のためとは言え、相手を探すためにパーティに出なければならないという苦痛に耐えなければならない。
それは、仕方ないことだと思った。
かといって、あの伯爵家の愛人などにはなりたくなかった。
そのため、ジオンからの誘いは天からの救いに思えたのだが・・・。
やはり、自分では彼に迷惑をかけるだけなのではと思ってしまう。
「これが終わったら、レース編みに戻って良いだろうか。」
「お嬢様？」
何か１つの事に集中したいと思ったのだ。
暫しの間、パーティや家のこと、ジオンのことなどを忘れていたかった。
しかし、その日のうちに届けられた招待状と彼からの手紙の内容に益々眠れなくなったブランカであった。

愛しのブランカ

出会ったばかりの私にこんなことを言われたら君はきっと戸惑ってしまうことだろうね。
けど、君に出会って、君の美しい紫の瞳と見詰め合った途端、私の心は大きく揺さぶられたんだ。
長い間、自分だけの誰かという存在を探し続けてきた。
その相手に出会えたんだったって、あの瞬間思うことが出来た。
何故かなんて聞かないでくれ。
私だって戸惑っている。
君という存在にもっと早く出会いたかった。
その件では母を少し恨んでいる。
君の母上と私の母は、親友というじゃないか。

母が君の母上と君を私に紹介してくれていれば、余計な回り道などしなくても
君に愛を囁けたのに。
ブランカ、君を見つけられたなかった自分を悔いたよ。
けど、漸く見つけて、出会うことが出来た。
私の将来の姿の隣には君が必要だ。
君と離れていたくない。
君が私以外の相手を探すと言うのなら、全力で阻止するつもりだ。
それほどに君に夢中であることを分かって欲しい。
これからのシーズンに私のパートナーとして一緒に出かけよう。
君の大好きな人達のために私は力を尽くすよ。

愛を込めて　　ジオン・G・クレインハイブ（マーティン卿）

つづく

マーティン卿からの恋文（後書き）

ジオンは余裕そうで、必死です。

いざ、ゆかん！ｂｙボイド（前書き）

短いですが・・・。

いざ、ゆかん！ｂｙボイド

大きなため息を吐いた。
目線の先にはマーティン卿からの手紙。
「ブランカさま？先ほどからため息ばかりですよ。」
ボイド夫人はクスクスと笑っている。
ジェシカもそれにつられているのが分かった。
今、２人はブランカのコルセットを締めていた。
そう、今日はマーティン卿の弟君の誕生会。
ブランカが出席した今までの会とは比べ物にもならない侯爵家主催のパーティなのだ。
マーティン卿が手配したマリアンヌと言うやり手の服飾家が、ブランカのトータルコーディネートをしてくれたのはいいが、金額のことを考えると、どれくらいだろうとブランカは頭の中で勘定していた。
生地１つにしても高級品だ。
もう少しランクを落としてはと言ってみたら却下された。
（何着作ったんだ？）
毎日フル回転でドレスが作られ、運ばれてくる。
味気なかったブランカのクローゼットが花を咲かせたように鮮やかになっていくと、ボイド夫人も娘のジェシカもうっとりとして、マーティン卿の愛情の深さを褒め称える。
で、ブランカはその度に顔を引きつらせているのだ。
（どれだけのパーティに出させるつもりだ？マーティン卿は・・・。）
彼女はまた大きなため息を吐いた。

クラインハイブ侯爵は、女王陛下の弟君である。
本来なら王家の血筋を持つ公爵家として暮すはずであったが、兄で

あるシルヴァリー公爵に遠慮して今の地位を名乗っている。
「公爵なんてものになったら、周りが煩すぎるでしょ。」
何故だと尋ねる人にはいつもこうやって答える侯爵に、人々は戸惑う。
目立たず、裏方に徹したいと言う弟の思いに答えて女王陛下は彼に侯爵の地位を与えたが、兄が陛下の右腕なら、弟は左腕と言っていい存在である。
そんな家の長男、つまり跡継ぎに見初められたとボイド夫人を始め家の者は浮き足立っているが、ブランカにとっては、ため息ばかりなのだ。
店でそこはかとなく嫌味だったお嬢様も来るだろうし、侯爵家と繋がりを持ちたいと願う貴族も多く来るだろう。
それに、弟君はその愛らしさと音楽センスに優れており、弾くピアノは女王陛下の癒しにもなっていると言う。
招待して欲しい貴族は山のように要るだろう。
そんな中に、何の繋がりもなかった自分が直接マーティン卿から招待を受けてしまったのだ。
「緊張しないわけがない。っていうか、久しぶりの会なのだ、あんまり締めすぎると苦しくて仕方ない。もっと緩めてくれ。」
「何をおっしゃいますか、細いウエストは貴婦人の基本ですよ。」
分かっているが、本当に久しぶりの会のため、ブランカは早くも倒れそうだった。
「でも、頼むからほどほどにしてくれ。今にも倒れそうだ。」
マリアンヌの手ほどきを受けたジェシカはブランカの長い黒髪を流行の髪型に結っていく。
「お嬢様が美しくしてらっしゃると私も鼻が高うございます。」
ニコニコと言う彼女。
いつもお金、お金と質素倹約を心がけてきたブランカだったが、主人があまり我慢をしすぎるのもよくないのだなと彼女達の笑顔を見て思った。

「ま、まぁ、お美しいですわ、お嬢様。」
目頭を押さえながらボイド夫人が言う。
「大袈裟だ。それに、どう考えてもこれはドレスの力だろう？」
苦笑するブランカにボイド夫人始め、使用人達は皆が期待のまなざしを送る。
「な、何？」
「よろしいですか、お嬢様。何が何でも、マーティン卿を骨抜きにするのですよ。」
ギョッとする。
「これで、もし、彼に失礼なことをして振られてしまったら、アシュッドバル家はおしまいです。カントリーハウスに居られるお父上とお母上もかなり期待されてますからね！」
そんなことを言われても困るとは言えないブランカは硬直するのみだ。
「できるだけマーティン卿には愛想良くですよ？」
またまた自然な笑顔などブランカにとって最も難しいことだと分かってるくせに・・・。
「マーティン卿の馬車が来られたぞ。」
執事の声が飛ぶ。
（ああ・・・来てしまった。）
頭では分かっているが、心が未だについていかないブランカであった。

つづく

ブランカ、硬まる

言ってみれば、対して豪華でも新しくもない屋敷である。
その屋敷に侯爵家の紋章の入った馬車が付けられた。
馬車から出てきたのは、正装に身を包んだ銀髪の若者。
身のこなしは優雅でソツがない。
馬車を遠まわしに見ている住人に視線を送るとニッコリと笑う。
その笑顔に街娘などはポ～っとなってしまっている。
彼が玄関に着く前に家の執事が素早く扉を開け、中へと誘う。
入り口をくぐり正面の階段を見ると、彼の望む人がそこにいた。
「・・・。」
言葉を発することができない彼にブランカは眉をしかめた。
（やはり似合ってないのではないのか？）
思わず自分の肩口や足元を覗き込もうとする。
「お嬢様！」
小声でボイド夫人に注意されて階段を慌てて下りる。
なれない高いヒールとドレスに梃子摺りながらも何とか下に降りると、かの若者がすっと自分の手を取っていた。
「あ、こ、こんにちは。」
彼はニッコリと笑うと手に取った彼女の甲にキスをする。
「ブランカ、とても素敵だ。」
「そ、そうだろうか・・・。」
「ドレスの色も、髪飾りも私の瞳に合わせてくれたんだね・・・。」
そう言われて気付く。
着ている服が綺麗な青色であることを改めて知る。
「えっ、いや、あの・・・これは・・・。」
そんなことにはちっとも気付いていなかった彼女に彼は苦笑する。
目線の先に居るボイド夫人もジェシカもうんうんと頷いている。
そんなこだわりがあったのかとブランカは頬を染めた。

「お子様の誕生会だから、昼間に行うんだけど、ブランカ、君には我が家でディナーも一緒に過ごして欲しい。」
ジオンの言葉にぎょっとする。
その顔にまた彼は微笑む。
自分の誘いにこんな反応を示す女性はいなかったのだ。
「あ、いや、その・・・近日中に仕上げたいレースが。」
ジオンはちらっと執事を見る。
「お嬢様、大丈夫でございますよ。お約束の日は随分と先にございますれば、今宵はマーティン卿とごゆっくりお過ごしを。」
何を言い出すんだとブランカは彼を睨んだが、ボイド一家は、ブランカにガンバレとの期待を載せた視線しか送っていなかった。
（私なんか本気で相手するわけがないだろう！）
心の中で何度言って見てもボイド一家には通じない。
「さあ、レディ・・・参りますか。」
エスコートされるのも久しぶりのブランカである。
ジオンのエスコートは一流でブランカは自分が姫君にでもなったような錯覚を覚えた。
ふわりと浮くような感覚のまま馬車に乗りこんだ。
自分の家にある馬車に比べると随分広い。
そんな車内でジオンの視線を彼女は感じていたたまれなくなっていた。
「あ、あの・・・お、弟君は何歳になられるのか教えていただけないだろうか。あ、それと、贈り物も用意せずに行くなんて、失礼だと思うのだが・・・。」
ジオンは何故かブランカの手を離さない。
狭く感じないはずの大きな馬車なのに何故距離をこんなに詰めるのかと彼女は不振がっていたが、彼が何か言い出さないうちに自分の思っていることを告げることにした。
「リオン？あいつは、７つかな。生意気にもその年で婚約者もいるんですよ。」

7歳で婚約者！
ブランカは驚きを隠せない。
「親友の妹に一目惚れだそうで。子供なのに、生意気なって。一目惚れなんてある訳ないって笑っていたら、何のことはない、私も貴方に一目惚れをしてしまった。」
熱の篭った視線。
まっすぐに自分を見つめる青い瞳に頬を真っ赤にしながらブランカは視線を外した。
「それと、プレゼントならちゃんと用意してますよ、ブランカ。」
何を？と彼女はまた彼を見た。
「リオンは、ホント生意気で私に恋人か妻ができるのを楽しみにしてたんですよ。優しい姉上が欲しいとね。だから、貴方こそが彼の誕生日プレゼントなんですよ。」
沈黙が流れる。
ブランカは首をかしげて彼の笑顔を見つめた後、驚きの声を出した。
「あ、姉上って、その・・・私は！」
彼の手がギュッと握られる。
「今直ぐに返事が欲しいのではないのです。けど、私の心が、体が、貴方だと決めてしまったようなので、貴方も覚悟を決めてお嫁にいらっしゃい。幸せにしますよ。」
「え、あ、あの。」
「で、私を幸せにしてください。」
ブランカの思考能力はこの時を持って固まってしまった。
「あらら・・・ん～。戸惑っている内に婚約発表でもしてしまうか。」
すっかり、どういうことなのか訳の分からない状態の彼女を乗せて馬車は走っていた。
ｔｕｄｕｋｕ

包囲網

「初めまして、あなたが姉上になられる方ですね。」
掛けられた声の明るさに戸惑うブランカはさっきから固まってばかりであった。
まず、侯爵家の豪華さに硬直。
大歓迎の侯爵夫妻に硬直。
そして、ジオンの弟君の言葉に硬直した。
「わ、私は、あ、姉上になるつもりは・・・。」
ないと言いかけてジオンの顔を見上げると何とも悲しそうな顔をしていた。
「ブランカ。そんな悲しいことを今ここで口に出さないでください。私の胸が張り裂けてしまいます。」
ぎょっとする甘い言葉に硬直。
そんなブランカを見てリオンがふっと笑う。
「兄上の言葉に、トロンとなるのではなく、硬直するご婦人を初めてみました。」
その言葉にジオンも笑う。
「だろ？彼女だけだよ。いちいち固まってくれる面白い人は。」
隣で硬直しているブランカをよそに兄弟は話をしている。
「それが基準ですか？」
「ん？基準の１つかな。見つめて倒れなかった初めての人でもある。貴重だろ？」
「そうですね。でも、悲しませないことを祈りますよ。」
ふっとジオンが笑う。
「お前も母上と同じ事を言うな。」
「もちろん。兄上には幸せになってもらいたいですし、兄上にちゃんと家を継いでもらわないと、ボクの目標が絶たれますから。」
幼いくせに大人びたことを言う弟に苦笑しながら、ようやく硬直が

解けたブランカを誘導する。
「ブランカ、気負わないところに行きますか？」
ホッとできる場所があるなら今すぐにでもと彼女は思った。

「ここは？」
「私の私室です。」
座らされた椅子に掛けているとメイドがお茶を運んできた。
メイドはニッコリとブランカに笑うと丁寧にお辞儀をして去っていった。
「あ・・・あの・・・。」
「この部屋に女性を入れたのは初めてです。」
「へっ？」
令嬢らしくない返事に慌てて口を閉じる。
「あ、あの弟君のところへ行かなくていいのですか？」
微妙に彼が間合いを縮めてきているように感じた。
「リオンには合わせましたし、もう少ししたら、貴方のレースのファンになった母上がこれからの貴方にとって大切になる方々を紹介してくれるはずです。それまで、ここでゆっくりしましょう。」
彼と2人きりという状況が何とも落ち着かないブランカ。
「それとも、私と2人きりはイヤですか？」
図星を指されてギョッとする。
少し目線をそらして首を振る。
クスクスと笑うジオン。
どうも彼の雰囲気がふざけているとしかブランカには思えなかった。
「あの・・・やはり、今日はこれでお暇・・・、」
いいかけでノックがされた。
「失礼。」
入室の許可をするとお辞儀をした執事が入ってきた。
「ジオンさま。レディ・ミランダさまがお越しになりました。」
誰だと言う顔をするジオンにブランカが、店で会った令嬢であるこ

と、ジオンが招待状を渡していたことを説明した。
「ああ、そうでした。で、そのレディ・・・が？」
「ジオンさま直々に招待を受けたのだと自慢しまくってます。」
砕けた言葉使いにブランカは驚くが、ジオンは全く動じてなかった。
ちらりとブランカを見るジオンは苦笑した。
「さて、ブランカ。将来の貴方を助けるために今日の日を用意した私に、恩を返してくれますか？」
「恩？」
ニッコリと笑うジオンに少々背筋を寒くしたブランカは自分への包囲網が狭まっていることに気付いてなかった。

つづく

危機的状況

「そうです、恩です。」
ブランカは、固まっていた。
「で、でも・・・今は、レディ・ミランダのことを対処してはいかがですか？」
ジオンはがっくりと体を一瞬倒した。
「はぁ・・・。」
大きなため息にブランカがびっくりする。
「ど、どうなされた？な、何か変なことでも言っただろうか？」
珍しくオロオロしている自分に少々呆れながらブランカは彼を見る。
ジオンは青い瞳をスッと細めてから優しく微笑むとその手を彼女の頬に添えた。
「では、レディ・・・。」
「レディ・ミランダ。」
「そう、そのレディの対処が終われば、私への返事をしていただけますか？」
戸惑う彼女の意志など置いて、ジオンは彼女の手の甲、そして、頬にキスをする。
「わっ！」
乙女らしからぬ声にまたジオンは苦笑を漏らしながら立ち上がると部屋を出て行った。

彼を見送って、1人になって初めてブランカはホッとした。
貴族とは言え、本当に自分の暮らしとは全く違う侯爵家。
ぐるりと見渡した広い部屋にも恐縮してしまうほどだ。
「本当に必要とされているんだろうか。」
疑問ばかりが口をついて出てくる。
1人悶々と考えていたブランカの部屋の扉が勢い良く開かれ、彼女

は飛び上がった。
「あれ？」
そこには見たこともない貴族らしい男が立っていた。
「ジオンは、何処に行った。」
彼はブランカを上から下までじっくりと見ると中に入ってきた。
彼女は、その不躾な視線がイヤだと感じたが、ジオンの知り合いらしいと判断し、軽く礼を取った。
「ジオンさまは、会場の方へと向かわれました。」
「ふうん・・・で、君は、今日のジオンの相手？」
ブランカの前に立ち見下ろしてくる男。
その視線に嫌なものを感じ、彼女は一歩下がった。
「・・・ふうん、いつもと違う毛色だな・・・。」
左に垂らした髪を掬ってくる男の手から逃れるようにまた距離を開けるが、男はまた近付いてきた。
「逃げなくてもいいのに・・・ジオンはどうせ、君を可愛がった後、ボクにくれるんだよ、」
「な、何を言ってる・・・。」
「ジオンの女遊びさ。いつも真面目な交際を匂わせて、飛び込んできた哀れなひよこを喰って捨てる。俺は彼と違って、少々乱暴なプレイが好きだから、女に、特に淑女と言われてる娘には脅しの材料だ。」
間合いを詰めてくる男にブランカは距離を一定に保とうと懸命だった。
男の口から語られる言葉も気になるところではあったが、身の危険を感じて仕方なかった。
「私は、あなたの相手をするつもりはない。」
きっぱりとした口調で言うブランカに男は笑い声を上げる。
「クラインハイブ家の財産？地位？名誉？んなのにあんたも惹かれたんだろ？貧乏貴族のアシットバル家のお嬢さん？その身一つ、一定期間ヤツを喜ばせるだけであんたの家も、あんた自身も安定した

生活を得られる、とでも思ってる？」
ジオンが差し伸べてきた手を取った事実。
彼の口から齎される甘い言葉。
全てを信じている訳ではなかったブランカにとって、男の言葉は突き刺さるものだった。
「愛人契約だけでも、あんたは安心できるんだろ？あんたのその顔、髪、何がアイツをそそらせたのか、俺にも教えてくれ。」
逃げ場がない。
ブランカは、目の前に迫る男を睨み付けた。

つづく

誇り

「・・・するな。」
彼女の口から聞こえた言葉。
男は聞き取ることができず、聞き返す。
「ん？」
「バカにするなと言っている。」
貴族の令嬢らしからぬ眼光と発言に一歩下がる。
「いくら貧乏だからとは言え、自分自身を借金の形にしようなどとは思わぬ。マーティン卿の思惑が何であれ、貴族の矜持を捨ててまで彼に身を捧げるつもりなどないわっ！」
男を突き飛ばさない勢いでブランカは部屋を飛び出した。
しばらく呆然としていた男は、フッと気付き、笑い出した。
「ははははっ、さすがジオンが気に入るだけはある・・・。」
ひとしきり笑って、この部屋に帰ってくる彼を待とうと思っていた男はハッとして今度は顔を青ざめた。
「・・・ヤバイ・・・その獲物を逃してしまったではないか！！」
ジオンが帰ってくる間に退散しようと男は部屋のドアに手をかけた。
しかし、次の瞬間、開いた扉の向こうにいた青い瞳とぶつかった。
「・・・アンドリュー・・・殿下？・・・何故ココに？」
ふと部屋の中を見ると愛しのブランカの姿がなかった。
ジオンは横目で隣に立つ男を見る。
自分より年上の親戚で、幼い頃からジオンを猫可愛がりしているのが、このアンドレアス・ケンジー・キッシンジャー皇太子殿下である。
濃い茶色の髪にジオンと似た青い瞳を持つ彼は、これからの王を支える頼もしい皇子であるが、いかんせんお茶目なところがあった。
お気に入りの従兄弟であるジオンと、もう一人シルヴァリー公爵家のライモンのことがお気に入りで、いずれは彼等を自分の側近に置

きたいと考えている人物でもあった。
「アンドリュー？ブランカに何かしましたね？」
「あ・・・いや、その。」
いつものように、ジオンの部屋を探り当て勝手に忍び込んだ女だと思った。
彼に勝手に恋焦がれ、玉の輿の乗ろうとするものは後を絶たない。
そんな彼女達を蔑み、返り討ちするのがアンドリュー殿下だ。
公務以外、えてして暇な彼は、偶にひられる親族のパーティにお忍びで訪れては目の眩んだ乙女達を誘惑して遊んで捨てると言う悪趣味を持っていた。
「言っておきますけど、いつも貴方がからかっている令嬢と彼女は違ったでしょ？雰囲気が・・・。」
ジリジリと距離を詰められる殿下。
「ちょーと、からかってやろうとな？」
「・・・で？彼女の反応は？」
「鬼の如く怒られてしまった。」
その答えにジオンの口角が上がる。
「いつも俺にたかってくるハエ令嬢を追っ払い、手痛い仕打ちをしているのは黙認しますけど、彼女にもし、余計なことを言って、俺に対する信用がなくなっていたら、許しませんから。」
ジオンは臣下の礼を取った後、部屋を出て行こうとする。
「ジオン！」
声をかけられて振り返る。
「本気か？」
「ええ、だから追いかけているんです。」
にっこりと微笑んだ彼の顔は以前のものとは違い真剣さを孕んでいた。
彼らしからぬ行動。それが全てを物語っている。
「女王陛下（ははうえ）が知ったら、俺にまで被害が来るな。」
殿下は頭を掻いた。

未だ相手の居ない従兄弟達。
だからこそ遊んでいられたのは事実だが、先日、ライモンに運命の人が現れたらしい。
「ジオンだけは、まだまだだと思っていたのに・・・。」
自分も真面目に相手を探さねばならないらしい。
彼の嘆息は誰にも聞かれてはいなかった。

つづく

勘違い

悔しい。
ブランカはそう思いながら邸宅をドンドン歩く。
階段を駆け下り、とりあえず、あの失礼な男のいる部屋から遠ざかりたかった。
あれが自分に対する周囲の評価なのだと彼女は思った。
名もない、貧乏貴族。
侯爵家などという上級貴族の屋敷にくるなど間違っていた。
声をかけられて、あの綺麗な瞳に自分が映っているのを見て、送られた言葉やドレスに心が揺れて、目が眩んだんだ。
（なんて愚かな。）
きゅっと咬んだ下唇。
強くかみすぎた唇からは俄かに鉄の味がした。
彼も弟君も自分には好意的だと思った。
周囲の視線は気になったがそれどころではなかったのが悔やまれた。
「帰ろう・・・。でも、その前に・・・。」
自分を落ち着けなければと彼女はパーティ会場の隅を小走りに歩いた。
ドレスを着ながらも凛とした姿勢で前を見ながら突き進んでいく姿にパーティに訪れていた紳士達が振り向いていたことなどブランカは全く気付いてなかった。
ジオンの弟の誕生日パーティであるが、招待されているのは兄であるジオンの年代に近い者達が多く彼の仕事関係の中流家庭の者達も来ていた。
彼らは商人としては一流だったが貴族ではなかったことにコネがなければ侯爵家のパーティには出られない。
けれど、ジオンも弟のリオンもそんなことには一切構わない人柄だったため、貴族達も商人の姿を目にしてても文句は言わず笑顔を顔

に貼り付けていた。
（あの商人たちよりも私は駄目だ。）
そんな風に思っているのは彼女と一部の女性陣だけだったが、ジオンがブランカをエスコートしてやってきた時は誰もが目を見張ったものだった。
とても美しいブランカに向けられる男性陣の羨望のまなざしと、女性陣の嫉妬に燃えるまなざし。
少々鈍いところがあるブランカはどちらにも気付かず、ただ転ばないことにだけ注意を払い歩いていたので、目の前にジオンの弟がいて挨拶をされた時は正直何を口走ったか覚えていなかった。
久しぶりの社交界。
自分にあれほどまで熱い、甘い視線を送ってくるジオンが側にいてくれたら、彼の言う通り自分のレース編みに対する顧客も増えると思っていた。
なのに、気が付けばド緊張の嵐。
おまけに変な男に絡まれて、啖呵を切ってしまった。
（淑女のすることではないな・・・。）
ジオンの部屋を飛び出して迷子になりながらも外を目指したブランカ。
やっとの思いでたどり着いたバルコニーで頬に風を受けて漸く我に返った。
ハイド夫妻には申し訳ないが、弟君は兎も角、ジオンとのことはきっと侯爵夫人にも反対されるだろうし、周囲の反応もあの男と同様なのだろう。
そう思うと胸が痛かった。
お世辞すら言ってもらえたこともなかったブランカは大きくため息と吐く。
「恥知らずもいいとこね、」
掛けられた女の声に彼女は振り向いた。
そこには、淡いピンクのドレスに身を包み、扇で掌を叩きながら近

寄ってくるレディ・ミランダの姿があった。

つづく

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n4993t/

貧乏令嬢と銀の精霊

2011年9月12日01時57分発行